



# 駿府と今川氏

第14回

## 戦国城下町と今川の

### 駿府

戦国大名今川義元の居館である駿府今川館を中心に、戦国城下町としての駿府は次第に繁栄していくことになるが、のちの江戸時代の近世城下町と決定的に違う点が一つあった。それは、城下町を構成する要素の武家町が極端に小さかったという点である。

戦国大名今川氏の時代は、まだ兵農未分離だった。家臣のほとんどは、合戦のときに武士として出陣するが、平時は自分が住む村で農業を営んでおり、城下町駿府に集住していたわけではなかった。この点が、兵農分離が進み、武士は農業から離れて城下町に住むことになったのと大きく違っていたのである。

したがって、重臣クラスの屋敷はいくつかあっても、今川氏が住む駿府今川館の周りの城下町を構成していたのは、主に商人と職人たちだったのである。

もちろん、駿府が東西交通の要衝としての場所でもあったことから、交通・運輸に携わる人々も多く居住しており、城下町駿府といっても、戦国時代の駿府の町は武

士よりも町人の比率の高い町となっていた。

## 義元より商人頭に任命された友野氏

残念ながら、その頃の駿府の人口がどのくらいだったかを記録したものがなく、実際の繁栄ぶりを数値で確認できるものはない。ただ、京都の公家三条西実隆がその日記『実隆公記』の中で、伝聞ではあるが、享

禄三年（一五三〇）の駿府大火に触れ、二千軒が焼失したことを伝えており、すでに一万人近くの人口を擁していたことは考えられる。商人の数も多かったはずである。おそらく「西の京」と呼ばれた周防大内氏の城下町山口と肩を並べる繁栄だったものと思われる。

では、今川義元は、駿府に集住してきた商人たちをどのようににまとめたのだろうか。今川氏の時代の文書に、町奉行の存在をうかがわせるものはない。その代わり、義元は「商人のことは商人にまかせろ」という方式を採用し

ていた。そのことを示すのが、商人頭の存在であろう。

義元は、駿府の豪商の中でも一番大きな友野二郎兵衛を商人頭として、駿府の商人たちを束ねさせていたのである。

なお、その頃駿府で羽振りのよかった豪商として、友野のほか松木、滝、太田、山本、市野、長島、大野、古市、星野、神氏などがいた。そのうち何人かは、甲斐から来たいわゆる甲州商人である。



▲賑わいをみせた駿府の町の現在の様子

撮影：水野 茂